

横浜キネマ俱楽部
第41号 会報
2015年11月3日発行

第41回上映会

ぼくたちの家族

(2014年／日本／117分／ブルーレイ上映)



©2013「ぼくたちの家族」製作委員会

2015年11月3日(火・祝)
[上映時間] ①11:00 ②14:00
[会場] 横浜市西公会堂

ロビー交流会
13:10～13:40

ぼくたちの家族

【ストーリー】

「普通に幸せ」な4人家族

若菜家は、ごく普通の家族——のはずだった。小さな会社を経営する父の克明(長塚京三)と母の玲子(原田美枝子)は、東京郊外のニュータウンに買った一軒家に住んでいる。長男の浩介(妻夫木聰)は結婚して独立、次男の俊平(池松壮亮)は大学生で、都内のアパートで一人暮らしをしている。

突然、「余命1週間」と宣告された母

最近、物忘れがひどいとこぼしていた玲子が、突然おかしくなったのは、浩介の妻深雪の両親との夕食会の席だった。ずっと意味不明の独り言を呟いているかと思うと、深雪の名前を間違い、唖然とする皆の前に唐突に「家族がバラバラになっちゃうなんて、お母さんいやだ！」と叫んだのだ。翌朝、克明と浩介は、玲子を病院に連れて行く。診察の結果は、脳腫瘍。医師は、「余命1週間」と宣言する。

知らなかつた母の本音

克明の稼ぎが悪いこと、浩介が引きこもりになつたせいでパートを辞めて、さらに家計が苦しかつたこと。ハワイに行く友達が羨ましいこと……少女のように天真爛漫な笑顔で、本音を話し続ける玲子。

母を助けるために、男たちは立ち上がる。



©2013 「ぼくたちの家族」製作委員会

【キャスト】

妻夫木聰
原田美枝子
池松壮亮
長塚京三
黒川芽以
ユースケ・サンタマリア
鶴見辰吾
板谷由夏
市川実日子

【スタッフ】

監督・脚本…石井裕也
撮影…藤沢順一
照明…栗山愛
録音…小松将人
編集…普嶋信一
音楽…渡邊崇
衣装…馬場恭子
ヘアメイク…田中マリ子

【監督・脚本 石井監督 プロフィール】

1983年埼玉県出身。大阪芸術大学の卒業制作として監督した『剥き出しにっぽん』(05)が第29回びあフィルムフェスティバル『PFF アワード2007』でグランプリと音楽賞を受賞。2008年香港で開催されたアジアン・フィルム・アワードにて、アジアで最も期待される若手監督に贈られる第1回『エドワード・ヤン記念』アジア新人監督賞を受賞し、国際的にも注目を浴びる。

第19回 PFF スカラシップ作品『川の底からこんにちは』(10)でブルーリボン賞監督賞を歴代最年少で獲得。さらに『舟を編む』(13)で第86回米国アカデミー賞外国語映画賞部門日本代表作品に史上最年少で選ばれる快挙を成し遂げ、同作は日本の映画賞を総なめにした。

その他の主な監督作に『あぜ道のダンディ』(11)、『ハラがコレなんで』(11)がある。

『ぼくらの家族』パンフレットより

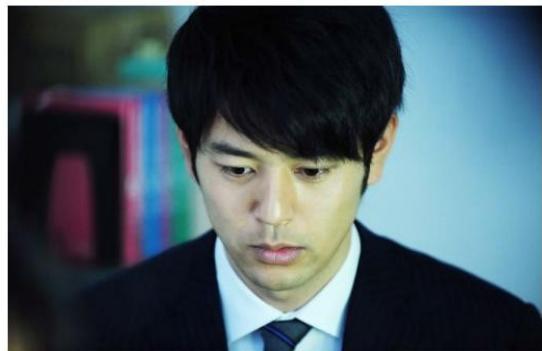
【プロダクション・ノート】 石井裕也監督/永井拓郎プロデューサー 対談より。

(『ぼくらの家族』パンフレットより)

○キャスティング

妻夫木聰さんと池松壮亮さんに関しては、監督が「二人の顔が同時に浮かんだ」キャスティングであったという。「妻夫木さんはずっと好きな役者さんでした。実は最も難しい『普通の男』を色っぽく艶やかに演じきれる稀有な存在だと思います。しっかりと考え悩んでいる痕跡がぐっきりと顔に刻まれているんです。そういう男は、同性から見てもカッコいい。池松君も妻夫木さんと同じ匂いがします。でも彼は、企画がスタートした時点ではまだ『少年』でした。この映画で、大人の男になる瞬間を撮れるかもしれない」と直感的に思いました」。妻夫木さんという兄、池松さんという弟、その距離感は本編でも絶妙な兄弟関係を築くことになる。原田美枝子さんは、役

者陣、監督、プロデューサーが声をそろえて言う、「僕が言うのも恐れ多いのですが、かわいいんです(笑)」。玲子は脳腫瘍が原因で、だんだん少女化していく。天真爛漫で少女のような要素が絶対的に必要で一番大事にしたかった部分。お母さんが病気になり、長男が指揮をとってそこに弟と父が「俺も俺も」とついていく。まるでお姫様を救おうと奮闘する男たちのよう。その気品、少女性が原田さん演じる母親のイメージだった。それを自然体で演じることのできるのは彼女しかいなかつただろう。さらに長塚京三さんは、今回は多額の借金を抱える父親、という役どころ。それでも映画を観終わってなぜか父を許せてしまうのは、「長塚さん自身が持つお茶目さや人間っぽさがにじみ出てるから」。いわゆる「ダメな親父」は以前にも『あぜ道のダンディ』などの作品で監督自身が描いているが、今回は一度失墜した父権をもう一度取り戻す、という「新しい父親」を目指したという。浩介が父になっていくように、父もう一度「お父さん」をやり直していく。



○撮影について

2012年3月中旬にクランクインし、4月10日にクランクアップした。若菜家の実家の場所は、山梨県四方津。山を切り開いた新興住宅地であり、原作者の早見さんの両親が実際に住んでいた土地である。シナハンで見て、やはりリアルな場所でやろう、とこだわった。父と息子が集まる中華料理屋も、実際に早見さんが父と行ったという場所で、携帯で話していて父がキレる、というエピソードもそのまま。その臨場感が映画のもつ「リアルさ」という魅力の一助になっていることは間違いない。

この若菜家を「自分の家族」と重ね合わせて撮影していたという監督だが、「それは僕だけだと思っていたが、話を聞くと他のスタッフや役者さんも自身の家族と重ね合わせていたようです。それができたのは、原作に普遍的な要素が詰まっていたからだと思います」と振り返る。

○石井監督からのメッセージ

「この映画を言葉で語るのは非常に難しいです。明確なテーマを持たずに映画を作ったからです。それは僕にとって初めての経験でした。テーマは必要でした。家族というワケのわからない『業』のようなものに理屈で向き合って仕方ないと、思いました。上手な宣伝文句が何も言えないことが歯痒いです。それでもこの映画では、素晴らしい俳優たちの『演技合戦』が見られると思います。言葉では説明のしようがない家族、人間というものを、彼らの演技を通して垣間見ることができると僕は確信しています。」

..... アンケート集計結果

＜2015.8.15 第40回上映会＞

『野のなななのか』

来 場 者 数 146名
アンケート総数 36枚(回答率 24.7%)

〈作品についての評価・感想〉

「とても良かった」15枚 41.7%

- 「哲学的な映画」と思いました。

「良かった」18枚 50.0%

- 多くのテーマが複雑に関連して表現されていると思いました。
- 複雑すぎて考えがうかばないです。考えさせられたが、もっとすなおに感じたかったです。
- 戦争を繰り返してはならないことのメッセージと輪廻のことを感じた。
- 舞台をみてるようでした。舞台化あり？

「あまり良くなかった」1枚 2.8%

「良くなかった」1枚 2.8%

- つまらん

「無印」1枚 2.8%



©2014 育別映画製作委員会／PSC

〈大林監督ビデオレターの評価・感想〉

「とても良かった」16枚 44.4%

- とてもよかったです。拍手もあって…。
- 長岡出身。花火物語の映画につづく、この映画をどうしても見たかった！！

「良かった」14枚 38.9%

「あまり良くなかった」0枚 0%

「良くなかった」1枚 2.8%

- ながすぎた。
- 映画前には長すぎでは？

〈横浜市内の映画館の数・状況〉

「満足している」3枚 8.3%

「まあまあ満足」14枚 38.9%

「不満」10枚 27.8%

- 小規模でよいから混雑しないで見れる会場が良い
- 横浜駅近くに少ない
- 名画の上映をふやしてください

「大きいに不満」0枚 0%

「無印」9枚 25.0%

[ゆうちょ振込による前売り購入]

各上映会3日前まで、ゆうちょ口座にて前売りを受付いたします。

前売り料金(1,000円)を以下の口座へご入金ください。

チケットは、当日受付にてお渡しいたします。

ゆうちょ銀行総合口座 記号 10200 番号 22932931
加入者名:ヨコハマキネマクラブ

[チケットぴあによる前売り購入]

Pコードについてはチラシ、ホームページにてお知らせします。

「セブン-イレブン」「サークルK・サンクス」でチケットの発券ができます。

—————[事務局より]—————

《東北に映画を届けよう！募金のお願い》

東日本地震の被災者、とりわけ子どもたちに、移動上映会で映画を届けるための募金をお願いしています。ロビーにカンパ箱を設けましたので、ご協力をお願いいたします。皆様からお預かりしたカンパは、コミュニティシネマセンターを通じて、被災地の事務局に届けられます。（2014年度募金総額は18,032円でした。ありがとうございます。）

横浜に映画ファンの思いが反映される映画感を作ろう！

横浜キネマ俱楽部は、横浜で永年親しまれてきた映画館の相次ぐ閉館を惜しむ映画ファンが集まり、2005年5月発足し、「横浜に映画ファンの思いが反映される映画館をつくる」ことを目標に掲げて活動を続けています。会の存在をより多くの皆様に知っていただき、映画館をつくる目標に一歩良質な映画を上映することで、映画ファンの交流の場を提供したい、という思いで年4回の上映会を行っています。

次回上映会のお知らせ

2016年3月5日(土)

上映時間 ①11:00 ~
②14:00 ~

伊藤千尋氏講演: 13:10 ~ 13:50

[入場料]

前売り 1,000円 当日 1,300円
障がい者 1,000円 (介護者 1名無料)

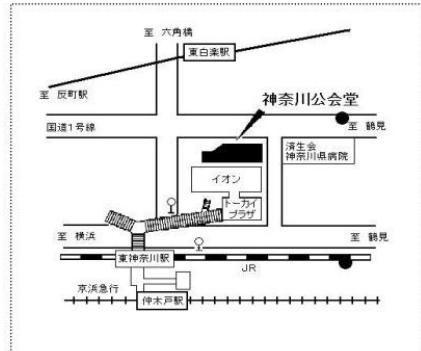
[会場]

神奈川公会堂 045-432-3399

JR東神奈川駅下車徒歩3分

京急線仲木戸駅下車徒歩5分

東横線東白楽駅徒歩8分



神奈川公会堂 地図

上映作品『NO』

(2012 / チリ・アメリカ・メキシコ / スペイン語 / カラー / スタンダード / 5.1ch / 118分)

監督 : パブロ・ラライン 脚本 : ベドロ・ペイラノ

出演 : ガエル・ガルシア・ベルナル、アルフレド・カストロ、アントニア・セヘルス、
ルイス・ニエツコ

オリジナル戯曲 : アントニオ・スカルメタ「国民投票」

これは、選挙キャンペーンによって“革命”を起こした、実話をもとにした事実の物語である。

「バベル」のガエル・ガルシア・ベルナルが主演し、第85回アカデミー外国語映画賞にノミネートされた社会派ドラマ。「Post Mortem」「トニー・マネロ」でチリのピノчет政権を題材に描いてきたパブロ・ラライン監督が、同政権の終焉を描いた。1988年、ピノчет政権への国際的な風当たりが強まる中、ピノчетの任期延長の是非を問う国民投票の実施が決まった。任期延長に反対する「NO」陣営は、若き広告プロデューサーのレネを採用してキャンペーンを展開するが……。

(映画.comより)



(C)2012 Participant Media No Holdings,LLC.

横浜キネマ俱楽部会報

発行 : 横浜キネマ俱楽部



〒231-0012 横浜市中区相生町1の15
第2東商ビル4階-C 労働市民法律事務所
氣付
TEL: 080-8118-8502 (10時~18時)
Eメール: yokohama_kinemaclub@yahoo.co.jp
HPアドレス: http://ykc.jimdo.com